新板
絵入

老子祇氣

三

へ 13
2730
3

老子形気草し 三

きつといはしぬ事かゝるといふ事
萬端(ばんたん)それ〳〵に其味(むまミ)の所(ところ)知(しる)といふが肝心(かんじん)
肝文(かんもん)ありし車すれは轄天狗(くさびぐ)なりし八畢(まる)と
いふあれし仏法とこのむ輩(ともがら)はおしつけの其体と
喰伝(くいしあ)神道と楽(この)む人ハ神の徹冊(こめ)と見たる
そのしこそれ鼓(つゞみ)を法して琴(こと)は琵琶馬はあるらハ
ゆゑ何よりして我所に習覚ある事も面
白きハ楽にあふし(このしで)なのまゝ志らぬ事ハ
面白かるて楽みもなし故に嫌(きら)ひふなり

門 へ 13
號 2730
巻 3

好ハいかゞは志らねども廓客(くるわ)ときく心なれど
見遠(ちゑい)なし下戸(げこ)ハ酒ぎらひ上戸ハ砂糖(さとう)
好子も甚(あぢハひ)味ひハある所をかくしぞめぬ合
記(たこ)れり意(こゝろ)すなハ好女(ゆう)の意は意の根なき色の
純粋(きつすい)をもされど流すれどもむる川にけ乃うき
ぬし志けき人毎(ごと)に染(そま)ぬ心乃袖ふまで胃ハ
目ほ鼻(はな)に付あきたきてぬれまで暮りもあれ方の
就(とき)わより暑(あつ)きもちむきめぐらみ御(ご)
供(ぐ)に傍(そば)へられしくほしきの間のわしも笑
類(くんぜ)せ合(ふくそ)ても利口(りこう)もる廓(ぞう)もおしまめそれ
ふき色香ほしくまに誠と儀みなかりてあり
張(みやり)の張乃又いほりの芽中より忽飛(ひよろりと)芽(め)と
出ほ信(しん)実(じつ)が誠のうへなし意乃純粋(きつすい)と云
延し故に性のふこれなし是とおもふべき
一向にまもらるれ了簡(りやうけん)なしで已(とおく)の口角て
傾城(けいせい)乃誠は争ひとかわりよし扨世間に意
は皆まこと信(まこと)のことは一寸と尺(ちよろ)さのろ粋
となり遊(すり)びてさら蔓(つる)くなる村乃虎浮気(うわき)れ
室(むろ)の梅続(つい)中ると外(よそ)の八重桜誠を雲(うそ)の尾
だれとて穂(わ)に納(きぬ)る秋りぜの音もかわる乱く

のいろ変おちくしも飛ハ虫ちくしも友抑ハ味
ひと意の意なるなかくと知その是と感ぞ
通しこゝと以て見ればた上ゟ迄れ一括而て定め
がたし文と学ふも武と習ふも諸藝力あれ
ど自ままて無為自然の理露れ不幸と察し輒
許するゟなかれこゝろ極意不至ゝぬまの彼の
是非とかくそハ今ふ自然妙和乃不粋をの
為ちまれ皮の基ハ分別といふべき者や然して
修ふ氣範は牛するは法かく蝸蝓れ碍に
如ゝる迄ぬを自然より名あれ言下にも食すて善良な人参ハ
命とかくし鬼成救ふの功あれども
されバ鍼灸狂氣するめ害なり水火の人我甚ふ
一旦もこれなくてハつねをそのかれども又それと
傷るうまへハあれどもおの自然乃場まは可も
なく不可もなく蒸事もなけれハ非なりそも
かく傷れるまもなけれハ努ぞる事業
おく愚人もなく賢人もなし以て天地の人
間より独るに今日上下の差別貧富乃階名
は眉乃衣の礫れとし貴く甘れ賤くせれ
今指となり貧之人と成ても佳なふあるりなふ

すこしおかしけれどこれが則天命といふそのことを
天命にしたがはずば孝ひとも發る故古語にも天
地も恨まず人をもとがめず是を天命と云
その合点なりがたきものなれバ孔子さへ
五十にして天命を知といはれたまひし此言づれハ
孝行をもてそれを心得て無上の大切なりとなれは又
今日の銘々持料と志まれて鷄乃湯水に譽さ
ことく一生ぶらぶら何事なく細々可もなく不
可もなく月日の場にちかしれ我心我ものは振
我のまゝハそれハ悪しきさまを可も是不可も是
士農工商各家職より外を務に至りて趣
欲の皮賊本にまかりとりて野持さがりよし
千里一寸の道なりぬ山にしたきそうれ
あそしらきうを挑むなる境界に溺れの方
又は脂音聲謀と工人とかかりて家命を
情まき事文し世を今ハこひしきなん
ど悔てかつかす又三日ものと家業とうせなく
十日猶つい拉の言におくさ本命がおすよ
世人は寐ころうて栄楽なるはなし
さらぬきをつけが起て働

蓏類ハ皆穀の餘りと売食すへし所
果は天よぶ人と数ゝ號有しむ
かの月於まくもりゆくなり
神ニ祈るといふ事
世に神ゟ願望を立て祈念すれハ神も納受
施しまし諸社のとり成然ては如何あれはある
事要やと思ふ意義隠者蓋て日それハ人
これんのまゝ所なりこれ経と書とくんよ
守ともなりとも祭し小山田乃
いたつりなりぬ案山子あり

いあ乃ことに夫升ひかくしてそれめ
と拵へ畠に据て獣と防の具とし文字には
案山子と書なり本人曰いまく
はげその皮を剥て池殺付て防ぶり其調
それと田畠に立置に他の獣ども此為に
と覬て近去しとし嫌ひかしとはかゞ
せの和訓なるへし故此がしことより
蘭人形なれども弾しても守るへしとも
又ちるはしともあけまし獣ゞ恐れて近は
まありといふめのし財多人ハ第狗の害に

して陰陽の正気と傚へるものなれど何
まそなりは時めける和ありき真人が係乃
下より動き出て天を活し淡地念力をもつて
神おに向て祈りし八神を見てより清浄純
粋の心年なれハ同気相通して感應遂し
神徳を徽明ならしめ有とも見えざる二十年にも
あらんは不測の事なりし世間にて神の徳は
鏡の高壷なるがごとしとて神乃和訓は鏡
の上畧なりといふ非なりとかく見がたきにて好み
神といふは此紙は尚とて紙の神の要
神訓を教諭の紙はいましめ
すべて事の此家の越間を隔てても甚
事ハ幸くならは天のみにも見えぬ手にも云ふ
まつ何もなふしらぬ香ひならは満くる
天地それを入れ例されハ香気と和訓せ
しるも神徳にかならずて天気是非訓なり
故人も僅のなりは招きて迷ひのなきもなり
又悟れる人ともよしも迷ふといふは
我志しては駆く従ひぬくく成りる人あれ浮
と詠めることし畢竟は悟も迷も一理之路

事跡なりとはいはれしといはれし先人教へのは悟と
云まくに不吉と錢面のかり娘しかり人錢
寄れハすてよといふ心のそれしらかさる
味ひを同しからむり未國に留るもの
まけるに彼一人の妾は愛し本妻にも思ひ
移てちぎりも淺からざりしに何とかん故ま
て深れなりひも縁ってきいのかを変る飛
鳥川淺瀬の水ハ末遂にことせ絶りも更に
いはの花よりかんにこの女ハ俤ちらすし目に
離れはて思ふべしふがいなき涙を濆しなりし淚の
袂の總錢あらし
疲裏へ行なとに醫療祈祷とはくせとも
ここ験さらになし入魂なる友達ハ来て同
ものはなれぬ浪ぎれるといふに二ツ乃療治な
れハとて聖魅ならんと離し彼是と推ハ廻
して水茶屋へ立寄貴賤男女もまりと線
古形に彼女ハ云ばかりの児と抱き来る
是はとなのハ味に世話もしきかたは執念の
おそろしきにあの仇日夜これと責ふゝ
かくも死しくむもれ我もり彩幸ほのんと

なく〳〵とも何卒〳〵とも君が求むる縁もなく是非なく
むなしく年月を過ぬといへども此女大に仰
天し是はおもひもよらぬ事なる哉
御いとまを給はりし身の間もなふ縁付いたし
此後のとく此子とのなければ甚わけさの
身をも一筆書残の露と消うせてあはれにも出
ぬししを我の師を涉もうなく侍ふといと
晴れたる挨拶に梅は敵悪縁ときめ
とく連の手おもきもりしく却て此方へ
就り附かじはかなき思ひをとし忍くわりけれ
もり代も尤もなし

又なかりし又所田舎にむつまじき夫婦の
ありし彼妻死けるがなかく来て恋慕乃
嘆乃あまり母ぞてゆりしさのこに継子と暮く
病しかとはむかし漢乃武帝反魂香
是焼しよりかのひふけ侍りてあれぶる
かく枕わろくきぶ臆病者ふしたる
け世おそ流しく是非寺へ入りて持ちもれかく
と流る和尚此同寺さ我の事もまとめし教化
しても切さすべし先是戒持彼ものゝ味

堂に付なる物は何ぞと名を問して見るよ
ある茶菓子に炒豆と封して倹文などにて
何をこしと男持ゆりてゆふべ時もたびりん
亡婦乃娑わらわれ来る件の封せしものを
おし中なる物を何ぞと問ふに女笑てそれは
いりまめにて候ふと答ふ男一編になりて押答
おそき寺へ行りたのしと告れハ和尚又何事ん
封せしものを披見し此中なる物ハ一度きらず
見よと是男悔り前後のごとく問ふそれハ何
歎に此の答り汝が其のみり汝名答
ず迷乱の底なりして甚出
豆は汝んて知のもれの来るの名我以子抄の
度を汝中を知しれを見と来る女も名を
志て虚なる物どもを封と切て見せとかよ思
胡麻也彼女いりまめを知の通りハ何とそ胡麻
もうさんや見まで此我すみし人乃
なぐ浅ましとて大ふさくも誇られしはその
家の念悔りて遊窟もせざりし
此世間へ不思議なる事いへ

いへども皆されば情性の生ひより起りて千惑乱
の氣九透間より入込て糺糧のすぢに説
廷ては未を識とおもひ或は所々と陸れる其
多し依死て氣の滞といふ事おほく
儒書には命非命といひ仏書では定業非
業といふ。いまださ死べき天命にあらざる者数斬
きり又自害し或は薬毒にあたりて死
ぬるは性氣盛にして末期の事に至も何
事にても念慮の沈滞するときは氣滞て
奇怪と成て出むとも（まよひ）世と惑も
ては全く火となりて燃る炎とも[illegible]

正にては消ても燃出し目に障るがごとく
らいまて又火より灰となりたるの理し同じ人間
の幽霊もはた理にて合点すべし。独り幽霊
乃その深く年数を経しの事の物あまた
甚くすずまぬ事にして先人を狡申して又猿犬解
あんどいへる様擬にかりけるありのたくひて
性神といへる役人至てそれは働く事を多言と
て一の九害て耳にあたれる心もよりのまた氏
声音乃委細なるものつまりといふ或言語とは

いかさし人さ姓しとして偏に理(つまやり)の志れる事(ね)共也
翁而の任ずる世猶まだ息(いき)を引とらずとかゝり
道者は役(やく)中に勤れども浮かひての魂魄(こんぱく)ぐるひ
ゆへ事とおもねし　又性気滞て幽霊になれども
事と生まれ甘くかくりの文武六勝なければ又事(ね)と
かきれず文武六勝は猟の斧金のといふ承るもの
たましぬは大工のおれるもの也て何ばかりでも
大工なければ出来ぬ大工よりまそもまをり
みてさへ我も速(そく)くれざる幽霊(れい)の六術(りくげい)ゆへなりぬ
難もかくのごとし幽霊は道世間にて人を惑猪者
あらずや　よくよく見定めいよいよ実(じん)は幽霊
なるはまのゝいはれ計(はけ)我歩くしさ人上の思
案(あん)あるべしといへり
管城子(くわんじやうし)石(せき)虚(きよ)中(ちう)学(がく)論(ろん)乃事
むかし管城子石虚中として親しき学友(ゆう)の
ありし其ころ石虚中は揺と長(なが)ち(えひ)の様に
あらし都乃豆腐(さうふ)此中ゆへなる我味ひ浪花(なにはえ)
乃橋(えし)の如きに世をへりしと叙(きん)じ土産を生より
春秋と過り本年いすゞ(いすゞ)川の流れ渡りより藤(さく)

京にせよまうせて一人の合力もなしとおもひ合
和尚此浦波平給ひし事と仰らる今は東乃
扇の御城也下にはなしはや安否も分ず
あひし物又謙習も是されはけんとおもひ石塔
小をりはりの樹をもちしける管城子か曰古語
に大国を治るは小鮮を煮るごとしとは何との事
ぞや石塔答て曰小鮮とは小魚のかと也小
魚を煮に強く探すれば骨もまじりて
をるしかたなし其ゆゑにあまり弄ばぬ也
既はなしはや蛭子の消光を出して法師

しておのずから味はきよくあるべし
管城子又曰天地の形をめぐらすものは何のおもや
石塔中答て曰そもそも後の事と見えくれよ
それみひときその也又曰蚯蚓と云は物
に安否なく動くものなればこそに性あるや
答て曰石と金と銭金て出と気に火の出るは
ありに火あるべしとおもひて覚に問し管
城子か曰我先刻より何と問ひても却てむかへ
しき返答ばかり形も何ぞおもはしめし

あるものゝやうなれども一向用の事不器の辨して
て急ぬ用事並にまだしぬ分別もせぬもの也
某が学文せんとは雲泥了簡ちがふなり
先それらも太平を治る志たりしひ事共なり
なりけれバ方便の修身として何事の時みしく
太平を治る事乃あらん是一せいしぬす用
の事なんど学するは平言きをけれ此法也
其入時もその時に不学ずし人のする事
名利ハけれど方も人あり又なる敷しきいとれあし
徒近ゆ学にしもあらず名僧も先達人とて近でしけれは進はあの時ね
徒の人を教へて一せん乞ふ侍でし押て
世方にあらずや必ず孫子事不無緒饒まで
とても萬世を治る介りと全くそれとも学ずし
おのずからこれが彼体の事云語かくなり
鼻の穴切て息の出る按排志しぬもの何ぞ
天地乃外と急しく我等不孔子此語に星
辰のゆるく分方の造きも張あるかなり
ぞく志なりと門人に告なし又觀書不詳にし
人と不天地といふ説などより理ぞ以て推

はた例をしれぬるりも五きまじこそ理くと推
まる極まり八のみとをまし似かも聴きぬり
体の不用なりぬ説ときとく極めたとりた
非人西郷の変を転せてるまま守ならぬ指
指とひかき梅と推ては桃と云ふ菖蒲に役
義とかりぬめのといふ様推ては御頭りの
城を背きまいかりても敵まは渡さぬまのと
知親のこそ身をもひせぬといふと推てこそ化俗
みなと申生のごとく今て意れてもち是非もあひ
非ならぬ物死のきもかみ塩所般若乃心が華紀
外尽より外出ぬと秘事とし已れが心は
玉乃ごとくみ五ふたるひとり我人せし内なる
華香もあらくとも水にて清けれは草寸まで
といふ俗縁のごとくあれは諸も浄穢理も揉
雑て乱舞乃席にも甘くらう乙礼義乃塩
みも不失是と老子は和光同塵といひ佛
法にて八不垢不浄と説り人生寸一の身も
度宮をなりし大かたは足といふ場を
しらぬを災の同色せ俗に十がたれぬ

こばまるといふ様(やう)あれとしたゞしかのすこし
きはまりなきの始(はじめ)縛(ゆるがれ)より八新しく成れ
れえなり又(かく)小と細(ほそ)成とし(て)累(やつかう)なりとも(まゆる)
我(わが)体(つゝし)とて不足(ふそく)なし聖人の教せよく
随(したが)しも悟し拙用(よう)神(しん)ぞは正直(しやうじき)一ふ
教(おきて)典(まもる)人に逢(あひ)がたく正直親の恐(おそれ)ハ子なく
すが正直商売人(あきんど)と利多と貪(むさぼる)正直やよろず
がいしの手に多くへし正直也うちこみへ
すへしゆ危(と)ふく(そ)ぬれかとしかけるハ
熟は消て神言不日朽原欲(よく)鏡の果は昔
の欲(よく)せともを飢(うゑ)ては食をほしがり我身寒(さむ)し
て八衣(き)るものとおもふ不足せ人欲の私とて不能(あたはね)
まゝと欲(ほつ)し貪(むさぼ)り操(みさを)あれ太(うず)集会不甚(はなはだ)敷ま
例(みし)より浅(あさ)ましきれたりしすや
ひざるはらし悲しくちゞれハ
まかりなりし脚(ひざ)楽(らく)さそそますます
月我をして山乃端には入ぬれと
ゆきの始る夜にはむくしうりあまり